二松学舎大学

# FD NEWS LETTER

自己点検・評価実施委員会

2026年度　1号

No.20



**ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）**とは、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称です。本学では、大学運営会議が所管する各種FD活動を、自己点検・評価実施委員会による検討・計画のもとで実施しています。
『FDニュースレター』は、年次報告として、FDに関する情報を取り纏め、情報を共有することにより、それぞれの活動を組織的な活動へと発展させるための一助として発行しています。
今回は、2026年度活動実施計画と、授業改善のために各学期末に実施している「学生による授業アンケート」の昨年度集計結果についてお届けします。

## 2026年度　活動計画

2026年度のFD活動計画は次の通りです。（年度途中の検討により、実施内容等を変更する場合があります。）

### ＦＤ研修会等の実施

☆春学期全学教員協議会　2026年5月30日（土）
☆春学期全学FD研修会　2026年7月18日（土）
☆秋学期全学ＦＤ研修会　（詳細については今後周知）
☆大学院ＦＤ研修会　（詳細については今後周知）

### 大学教育学会への参加

☆大学教育学会大会（6月開催）や課題研究集会（12月開催）に教員を派遣し、最新の教育情報を収集し、事後に参加教員による報告会を行います。

### 公開授業(相互授業参観)

☆同一科目で複数クラス開講されている科目について、その担当教員間の相互授業参観を行い、授業運営手法や評価方法のすり合わせなどを実施します。公開授業を実施します。自己点検・評価実施委員会において対象授業を検討予定です。

### 各種自主FD活動の支援

☆学科会議や基礎ゼミ・語学科目の担当者間で行われる各種意見交換会や打合せ等、教員間で自主的に実施されるFD活動及び教育改革に関するプロジェクトについて支援を行うとともに、実施後に提出される報告書を取りまとめ全学的に情報を共有します。

### 学生による授業アンケート

☆各学期末に学生による授業アンケートを実施・教育効果を測定し、授業改善につなげます。

## 2025年度　学生による授業アンケートについて

授業アンケートでは、教育効果の測定や学生の学修行動の把握を行うため、様々な設問を設定していますが、ここでは抜粋して、授業の満足度や1週間の学修時間に関する設問の集計を紹介します。

＊アンケートは、学部・大学院の全学生を対象に原則として全開講科目（回答内容から個人が特定されないようにするため、学部科目では履修人数が5名以下、大学院科目では4名以下の科目等は対象外）で実施しています。

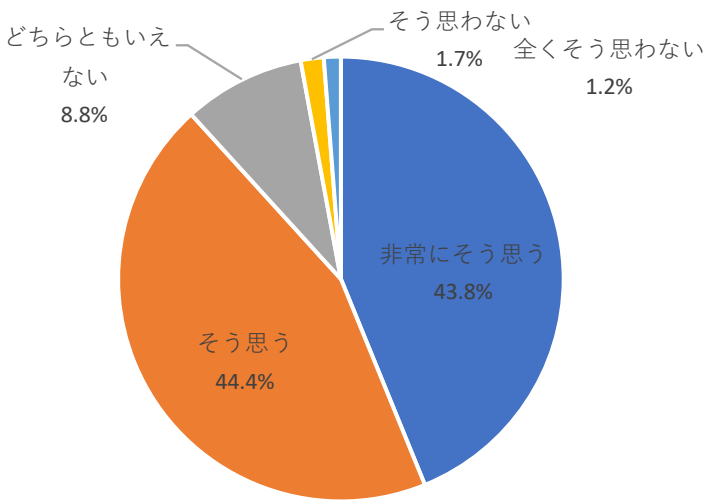
### ◆2025年度　学生による授業アンケート　回答率等

| | 春学期 | | 秋学期（通年科目含む） | |
|---|---|---|---|---|
| 実施科目数 | 学部科目 | 506 | 学部科目 | 505 |
| | 大学院科目 | 18 | 大学院科目 | 15 |
| 学生の回答数 | 学部 | 45.5%（前年度：34.7%） | 学部 | 37.8%（前年度：27.9%） |
| | 大学院 | 50.8%（前年度：45.7%） | 大学院 | 37.4%（前年度：62.8%） |

### ◆授業への満足度（春学期・秋学期の合計）

Q.授業で得たことに満足できたと思いますか。

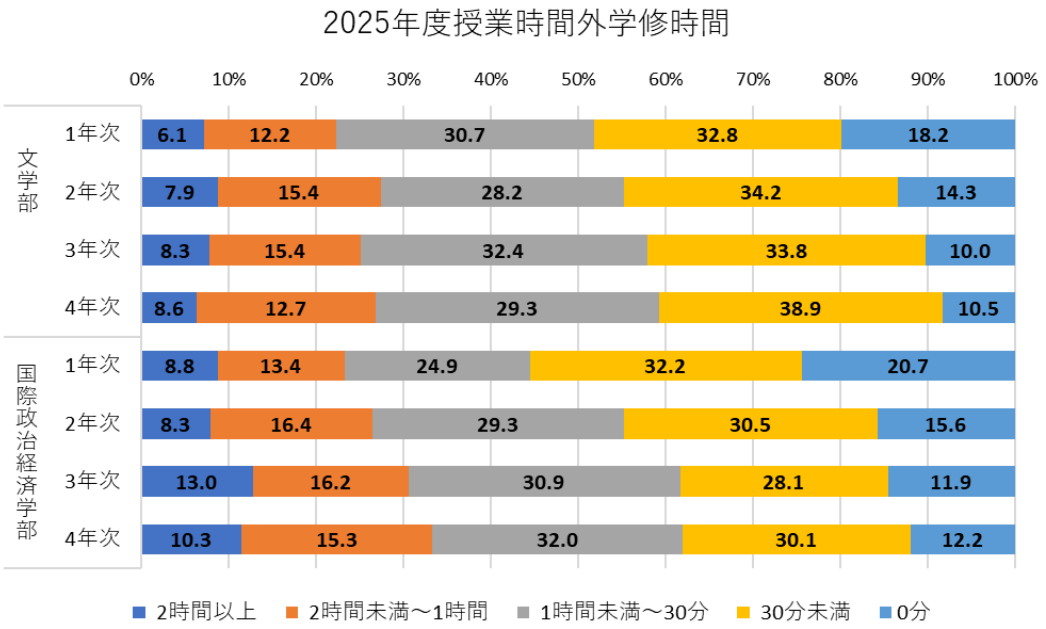
学部全体では「非常にそう思う」43.8%、「そう思う」が44.4%となり、アンケート実施科目における回答学生の約9割弱が授業に満足しているという結果となりました。一方で、「そう思わない」「全くそう思わない」の合計は2.9%に留まりました。カリキュラムにおける授業内容の設定が適切であったことや、担当教員による授業運営の工夫が実を結んだ結果と考えられます。



## ◆学部学年別　授業時間外学修時間（春学期・秋学期の合計）

Q.あなたは1回の授業に対し、平均してどの程度予習・復習・関係文献の読書などの授業時間外の学習をしましたか。『授業時間外の学習』には、授業で課された課題・宿題、授業内容に関連して興味を持った記事・文献・図書等の読書、なども含みます。

大学の授業は、教室等で受講する授業の時間以外にも、自宅や図書館などで予習・復習・調査等の授業外学修を行うことが前提となっています。本学では、多くの授業科目を2単位・授業回数は全15回（各回90分）と設定していますが、このページ下部にある「大学設置基準」（学修時間の考え方を定めた法令）に基づく計算によると、授業１回につき必要な授業外学修は4時間となり、授業担当者はこのことを踏まえた授業設計を行う必要があります。
アンケート結果からは、どの学年も授業１回につき「1時間未満～30分」と「30分未満」がボリュームゾーンになっています。上級生になるほど科目の専門性と難易度が上がるため、学修時間が増加する傾向はあるものの、残念ながら全体的には授業外学修時間が少なめです。また、「0分」の学生が一定数いる科目もあり、科目の難易度が低すぎることも懸念されます。この状況の改善のためには、担当教員による適切な難易度設定と、授業外学習の指示や、学生の自主的な学修を促す工夫(参考文献の例示等)が必要になります。




### ○学修時間の考え方

大学基準では、「１単位の授業科目には45時間の学修が必要」と定められています。これを本学の標準的な２単位授業にあてはめると、必要な学習時間は90時間（45時間×2）で、このうち授業時間は30時間です（1回90分を2時間とみなし、2時間×15回で計算）。差し引き60時間が必要な授業外学習の時間となります。これを授業回数15回で割ると、授業回数１回につき４時間（60時間÷15）の学修が必要、となります。

## 2025年度学生による授業アンケートを受けての授業改善例等

2025年度に行った学生による授業アンケート結果に対する授業担当者のコメントシートから授業改善への取り組み事例を抽出して、大学全体レベルの授業改善の取り組みとして学内で共有しました。以下、コメントに挙げられた各教員の取り組みの事例の一部をご紹介します。
授業科目によって回答数にはばらつきがありますが、教員が教育効果の手応えを感じたり、授業運営の改善点を見出したり、学生の学修成果や意欲を向上させるヒントを得られるとして授業アンケートは重要な教育改善の機会となっています。

**◆2025年度授業アンケート　大学向けのコメント回答人数**

| | 専任教員 | 非常勤講師 | 計 | 回答率 |
|---|---|---|---|---|
| 春学期 | 54 | 99 | 153 | 64.3 |
| 秋学期 | 40 | 89 | 129 | 56.3 |

### 2025年度春学期

板書やスライドを写真撮影しないという教室内ルールを設けてみました。ノート・メモを取ることを通して、学生の間だけではなく社会に出てからも必要な「聞く力、書く力」を少しでも蓄えてほしいとの考えから導入したルールでした。

動画の視聴や簡単なワークを多用したところ、学生の興味関心の喚起に一定の効果があったように思う。

今年度の新しい試みであるオンデマンド授業（講義動画視聴後に小テストで理解度を確認）については、好意的なコメントが２件あり、否定的なコメントはなかった。

UNIPAにはLive Campusにはなかったクリッカー機能を使用したが、これは従来の小テスト機能に比べて、学生にとって心理的なハードルも低く、授業内で理解度を確認するのに利用しやすかった。

学生それぞれが有する各種の特性（障害となる場合のものを含む）に配慮して、授業設計をUD化する工夫。

シラバスに沿って学修を積み上げるために、各回の授業での指導と小レポートでの評価、理論の教授と実践的な演習のバランス、個々の学生への適切なフィードバック、事前学修、事後学修の適切な質と量の提示、個の考えを生かした協働学習の導入を実践し、各学生が自身の成長を認識し、他の学生とともによさを認め合う学習環境とする。

授業の最初に、前の週で学生にリアクションペーパーに記してもらった質問や疑問に答えたことが、学生の理解を深めることにつながったと考える。

授業に関わる上での、および授業に参加する際のルールを事前に明確に設定し、期間を通して徹底することが大前提となることを実感している。

可能な限り授業回ごとに小テストを実施することにより、受講生の理解を図り、落ちこぼれる受講生を減らすよう努めたい。

## 2025年度秋学期

「この授業は、学生の私語に対して注意をしていて良かった。」というコメントがありました。FD等で、ここ数年、私語によって授業の満足度が下がる学生がいると聞いていたので、大人数の授業では厳しめに注意しました。

学生の理解度や学習負担を考慮し、今年度は入門レベルのテキストを採用しました。これは、多くの学生が授業内容を理解しやすくし、授業内の活動に参加しやすい環境を整えることを目的としています。

初回授業で、授業の進め方と講義の概要、成績評価の方法などの注意事項等を説明・確認し、シラバスを読んで答える課題を初回授業最後に授業内で提出してもらうことで、授業の進め方や講義の内容、成績評価方法を履修者が理解した上で、具体的な講義内容に入るように工夫している。

評判の良かった動画の視聴や簡単なワークを引き続き多用したところ、学生の興味関心の喚起に一定の効果があったように思う。

課題提出スケジュールを提出期限前から複数回板書し、学生が課題作成のスケジュールを作りやすいように配慮した。学生同士で、授業の内容を確認しあう機会を複数回設け、理解の促進と定着に努めた。

生成AIの利用が一般化していることを踏まえ、レポート・コメントペーパーを、内容への具体的言及や理解過程の記述を必須とする形式とし、安易な生成では対応しにくい課題にした。あわせて、試験などではフィードバックを通した能力向上を狙った。

毎学期期待している予習・復習にかける学習時間がなかなか取られないので、どんな点をどのように予習・復習すべきか工夫を凝らして提示している。これらの必要性・重要性を今一度強調したい。

レポートを学生が順番に行い、発表者には全員からリアクションペーパーを渡した。大学4年生でも発表を通して相互理解が深まったということは予想外の効果であった。

講義と学生の演習活動の割合を工夫しました。講義がメインになる授業回でも、各回わずかな時間でもアウトプットの時間を設ける(アイデアを創出するゲームを実施する、短文を書く、提出レポートの下書きを作成するなど)ことを重視しました。

講義内容やテキストの補足事項を視覚的に分かりやすく伝えるため、毎時間PowerPoint資料を作成・活用した。視覚・聴覚に訴える資料を積極的に取り入れ、学生の興味・関心を喚起するよう努めた結果、新たな気づきや発見を促し、自発的な学習意欲の向上に一定の成果が得られたと考える。

## 全学教員協議会

2026年5月30 日（土）に全学教員協議会を開催しました。
対面とオンラインのハイブリッド開催で、教職員39名が参加しました。

「本学の今後の方針について」　学長　佐藤　晋

「ハラスメント防止について」　ハラスメント防止委員長　吉丸　雄哉

ー事務部からのFD報告ー

「科研費の申請について」　大学改革・IR推進課

「学生の実態・満足度調査　集計結果」　大学改革・IR推進課




講演中の佐藤学長

○佐藤学長の講演では、少子化の急速な進行やAI等デジタル技術の発展、文科省による文理転換・理系人材拡充政策といった外部環境の激しい変化に対し、本学が今後どのような対応をとるべきか方針の説明がありました。
参加教員からは、「少子化に伴う大学の存在意義の変化について、大学のあるべき姿や目指すべき方向性についての議論を深めることが大切であると感じました。」などの感想が寄せられました。

○ハラスメント防止委員長の吉丸教授から、ハラスメント防止に関する注意喚起がありました。

○FD報告では、大学改革・IR推進課から科研費の採択状況や公募情報の報告、2025年度に実施した学生の実態・満足度調査の集計結果についての報告がありました。

・科研費の申請についてでは、本学の応募・採択状況の説明がされたほか、現在科研費の研究課題を持っている教員に対して、本学における科研費ルールの変更点等について説明がありました。

・学生の実態・満足度調査の集計結果については、P.2〜5に記載の結果について、より詳細な情報や傾向を踏まえた説明がされました。
教員からも「日々現場で感じている雰囲気との比較ができ、参考になった。」といった感想が多く寄せられました。




小沢大学改革・IR推進課長による集計結果の説明

## 春学期FD研修会

2026年7月18日(土)に春学期FD研修会を開催しました。
対面とオンラインのハイブリッド開催で60名が参加しました。本学のFD研修会は全専任教員参加必須としており、当日参加できなかった教員は、録画視聴することとしています。

FD講演

「教育におけるAI利用」　国際政治経済学部　今井　悠人　准教授

「生成AI利用上の諸注意ーガイドラインを基にー」　須藤　和敬　学務局長

生成AIが急速な発展を遂げる中、本学においても授業での活用方法やルールに対して、不安や疑問の声が寄せられています。そこで今回、自身の研究にもAIを積極的に活用している国際政治経済学部の今井准教授と須藤教授による講演を実施しました。

◆今井准教授：「教育におけるAI利用」
今井准教授からは、生成AIの歴史や各モデルの特性といった基本構造から、教育現場での最新事例まで幅広い解説がありました。授業等で生成AIを使用する利点と課題を確認した上で、これからの生成AI利用は一律に禁止するのではなく、教員が適切にコントロールしていく必要があることが示されました。講演後には積極的な質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われました。

◆須藤教授：「生成AI利用上の諸注意ー ガイドラインを基にー」
須藤教授からは、本学が昨年度末に学生に向けて作成した「二松学舎大学の学生のための生成AI利用に関するガイドライン」をベースに、生成AI利用に伴うリスクと活用例について説明がありました。



講演を行う須藤学務局長

FD報告

「大学教育学会第48回大会　参加報告」　国際政治経済学部　森倉　悠介　准教授

続いて、国際政治経済学部の森倉准教授から、「大学教育学会第48回大会」(6月6日～7日・創価大学にて開催)の参加報告がなされました。
大会1日目の「ラウンドテーブル」及び2日目の「自由研究発表」の内容紹介の後、「今回の参加を通じて、生成AIの利用を一律に止めることは難しいと感じた。生成AIを学び、活用する機会が広がる中で、私立文系大学として、学部・学科の特性や育成したい人物像を踏まえ、生成AIを教育課程にどのように位置付け、各授業へつなげていくかを、今後考えていければいいと思う。」とのまとめがありました。

二松學舍大學

2026年8月31日発行
【お問い合わせ先】　二松学舎大学 大学改革・ＩＲ推進課
TEL: (03)3261-1285
FAX: (03)3261-7413
E-mail: gakumu@nishogakusha-u.ac.jp